

河内良弘編著・本田道夫技術協力

滿洲語辭典

磯部 淳 史

十七世紀にツングース系の滿洲（マンジュ Manju）人によって建国された清朝は、二十世紀初頭に至るまで、漢地を始め、滿洲・モンゴル・チベットなど中央ユーラシアの廣大な地域を統治した國家である。清朝は、従來「最後の中國王朝」として捉えられてきた部分が多かったが、近年では、こうした廣範な地域を支配した多様性に着目し、中國史の視點のみならず、北アジア史・内陸アジア史の視點から清朝を捉え直し、廣くアジア史の中で位置づける研究が進んでいる。

そうした研究において積極的に用いられている史料が滿洲語（滿文）史料である。滿洲語は清朝の第一公用語であり、あらゆる行政文書や官撰の記録は、まず滿文で記し、そこから漢文に譯したものが大半である。そのため、とりわけ漢地以外の清朝の支配地域を研究する際には滿文史料が重視され、かつては漢譯されて出版されていた滿文史料も、近年では原文のままで公開・出版されることも多くなった。

主なものを挙げてみても、太宗・順治兩朝の實録の原史料と

なった「内國史院檔」のうち、太宗朝を扱った「滿文内國史院檔」が一九八九年に、二〇〇三年には順治朝を扱った「順治朝滿文内國史院檔」「康熙朝滿文硃批奏摺」がそれぞれマイクロフィルム形式で中國歴史第一檔案館より出版され、また「軍機處滿文準噶爾使者檔譯編」（雍正・乾隆年間にかけてのジュンガルの使者に關する文書を収録したもの。中國歴史第一檔案館、二〇〇九年）、「乾隆朝滿文寄信檔譯編」（皇帝が各地の高官に送る滿文の祕密旨の抄本。嶽麓書社、二〇一一年）、「閑窓録夢譯編」（道光年間の滿洲旗人・穆齊賢が滿洲語で記した日記。中央民族大学出版社、二〇一一年）など、漢譯と滿文原文を合わせて掲載した史料が相次いで出版され、これらを活用した研究も續々と發表されている。この傾向は日本にとどまらず、歐米でも滿文史料を用いた新しい研究が増えるなど、今や清朝史研究を進める際には滿文史料の精讀が必須であるといえよう。

しかしながら、こうした滿洲語史料の公開・利用が進む反面、日本で出版された滿洲語史料讀解の工具書は、一九三七年に刊行された羽田亨編『滿和辭典』（京都帝國大學滿蒙調查會發行）がほぼ唯一のものであり、しかも『滿和辭典』は出版以降一度も改訂されず、現在は絶版である。また滿洲語の辭書としては、福田昆之編『滿洲語文語辭典』（FLSL發行、一九八七年）、中嶋幹起編・今井健二、高橋まり代協力『清代中國語 滿洲語辭典』（アジアアフリカ基礎語彙集、不二出版發行、一九九九年）などがあるが、『滿和辭典』以降は長く歴史學者による滿洲語の辭書自體は出版されなかった。

そうした中で刊行されたのが本書『滿洲語辭典』であり、これ

は河内良弘氏が二十餘年の歳月をかけて編集したもので、『滿和辭典』以來七十七年ぶりとなる歴史學者の手による滿洲語の辭書である。なお、本書は出版に先立つ二〇一三年十二月に朝日新聞や毎日新聞にも取り上げられている。このことから、本書に對する社會的關心の高さがうかがえよう。

編者の河内良弘氏は、『明代女眞史の研究』（同朋舎發行、一九九二年）のほか、多くの研究業績で知られる女眞史・滿洲史の大家であり、二〇一二年まで滿族史研究會の會長を務めるなど、日本の清朝史・滿洲史學界を長く牽引してきた研究者である。河内氏はまた、「ニシヤン・サマン傳譯注」（京都大學文學部研究紀要）二十六號、一九八七年）や「滿漢合璧宮中檔雍正朝奏摺譯注」（京都大學文學部研究紀要）三十一號、一九九二年）、『中國第一歴史檔案館藏 內國史院滿文檔案譯注』（二〇一〇年、松香堂書店發行）などの滿洲語史料の研究も多く手がけており、滿洲語を獨學で學ぶための文法書である『滿洲語文語入門』（清瀨義三郎則府・共編、二〇〇二年、京都大學學術出版會發行、舊版は一九九六年發行の『滿洲語文語文典』の著作もある。

河内氏は、かつて山本守・藤枝晃・今西春秋・三田村泰助とともに『滿和辭典』の實務編集を擔當したメンバーであり、同書は誤植が多く、また用例が全くないことなどから、同書だけでは滿文檔案などの史料を正確に讀解出來ないという問題点を早くから指摘していた。また、先述のように、日本國內において滿洲語の辭書は、『滿和辭典』以來ほとんど編集・出版されなかったが、中國においては安雙成『滿漢大辭典』（遼寧民族出版、一九九三年）や胡增益主編『新滿漢大詞典』（新疆人民出版社發行、一九

九四年）などの滿洲語の辭書が出版されている。確かにこれらは、收録語彙や用例も豊富であり、滿文史料を讀む際にも有益な辭書であるが、しかしながら、日本人が滿洲語を讀む上で、中國語で譯語が記された辭書は適さず、むしろ滿洲語は日本語の文法構造とよく似ていることもあり、日本人が滿洲語の微妙なニュアンスを理解するには、やはり日本語の辭書を用いることが最適である。であると河内氏はいう。

このように河内氏は、『滿和辭典』に替わる新たな滿洲語史料讀解のための辭書を作る必要性を長年感じ、一九九〇年代に入ると辭書作成のための企劃を本格的に開始した。河内氏は最初、「中國黑龍江省滿語研究所」との合同作成による滿洲語の辭書を企劃していたが、コンピュータ・ソフトなどの問題から一旦斷念し、一九九二年になってトヨタ財團の研究助成に採用されたことで編集作業は開始され、その後、香川大學經濟學部教授の本田道夫氏の協力によって滿洲文字フォントと、滿洲文字・日本語文字・英文字が扱える「滿洲文字入力・編集・印刷システム」を作成することに成功し、これらを用いて入力作業が進められた。辭書作成に必要な史料も、河内氏が北京の中國第一歴史檔案館に足繁く通い集めたものである。そうして入力・編集・校正作業が行われ、二十數年の歳月をかけて完成したのが本書『滿洲語辭典』である。

さて、本書の大きな特徴はその豊富な語彙と用例にある。收録語彙は清朝が編纂した對譯辭書である『清文鑑』（増訂・四體・五體の三種、四體は滿・蒙・漢・藏、五體は滿・蒙・漢・藏・回）をはじめ、『清文總彙』『大清全書』『清文備考』『同文彙集』

『清文集書』などの辭書文獻から集めた約四萬語にのほり、これはこれまでの滿洲語辭典の中でも最多の収録数である。見出し語は、メーレンドルフ (P. G. von Möllendorff) の音譯法に従ってローマ字化し、アルファベット順に配列し、見出し語のローマ字・本田氏の協力で作成されたフォントを用いた先述の滿洲文字・品詞・番號・日本語譯・見出し語漢譯・出典・用例・用例の出典の順で記されている。

先述のように、『滿和辭典』には譯と出典だけが載せられ、用例は記されていないかった。これは河内氏自身も指摘しているように、史料を讀むための辭書としては不備であり、とりわけ初學者が、獨特の表現を用いることの多い檔案類を讀む際には、やはり用例は缺かすことが出来ない項目であろう。もともと、『滿和辭典』は用例を缺いているが、他の辭書、例えば福田編の『滿洲語文語辭典』には用例が多く収録されている。これらを用いれば、『滿和辭典』の不備はある程度は補うことが出来た。しかしながら、『滿田』『滿洲語文語辭典』は言語學の面から作成されたという性格が強く、引用される用例は『滿文金瓶梅』『合璧西廂記』などの文學作品から多く採用されており、歴史文獻からの引用については、當時の史料状況の制約もあって『滿洲實錄』『滿文老檔』などごく限られた文獻からしかなされていない。そのため、實錄や檔案などの歴史文獻を讀む際には對應しきれない面も多かった。

これに對して本書は、『宮中檔雍正朝奏摺』『滿文内國史院檔』『滿文太宗實錄』『禮科史書』『宗人府史書』などの檔案類や新出の史料から多くの用例を収録している。この史料からの用例の多さは、従來の辭書の不備を補うだけでなく、檔案史料には譯出

するには難解な表現も多いことに鑑みれば、多様な滿文史料を解讀する上で益する所も大きい。このように、語彙数、用例数の多さにおいて本書は他の辭書を壓しているが、これが編者の河内氏の二十年に及ぶ地道な資料収集の賜であることはいうまでもないだろう。

また、評者が實際にこの辭書を使用してみて感じたことであるが、本書の特徴はその日本語譯の豊富さにもある。その点もまた、本書に先行する『滿和辭典』や福田『滿洲語文語辭典』との大きな相違である。

例を挙げれば、滿洲語の「weile」という語は、通常「罪」あるいは「事・仕事」という二つの意味があり、『滿和辭典』でも福田『滿洲語文語辭典』でもそのような譯語が載せられている。ところが、『weile』には「罪」から派生した「罰銀」という意味もある。實錄や檔案などには、しばしば罪をなした文武の官人を處罰する記事が登場するが、その際に、刑部の判決や處罰を指示する皇帝の敕旨の中の文言には、「tuhere ani weile」という語句が頻出し、これは通常「規定通りの罰銀」と譯される。「weile」の「罪」から「罰銀」を聯想して譯すことはもちろん可能であるが、この表現に慣れていない者からすると、すぐにはこの譯語は導き出しにくく、事實評者も滿洲語を學び始めた當初はこれを「罰銀」と氣づかずには譯してしまつた経験がある。

こうした従來の辭書が「weile」を「罪」「事・仕事」の譯語しか記さないのに對し、本書の「weile」の項を見ると、「罪・罰・罰銀／事・仕事・造れ」というように、「罰銀」という譯語が記載されている。用例においても、『滿文老檔』の例が引かれてお

り、初學者でも容易に正しい譯が導き出せるようになっていた。これは、多くの滿文史料を通過し、『宮中檔雍正朝奏摺』や『內國史院檔』などの滿文史料の譯注を多く發表している河内氏だからこそ出來た細部まで行き届いた譯語といえる。このように、本書に収録された單語には豊富な譯語が付されているのであるが、このほかにも、『Hafan etliche』に「革職」[hafan]は「官職・官・官員」で、『etliche』は「削る・壞す」を意味する『etlembi』の過去形」というように、史料を讀む際に頻出する熟語も充實しており、その點も本書の特色といえよう。

編者の河内氏は、本書の「あとがき」において、自身が期せずして「文法書」「讀本」「辭書」の語學の學習における「三種の神器」を作成してしまつたと述懐している。河内氏は、インディアナ大學に交換教授として赴任し、學生に滿洲語を教えた際に用いたテキストをもとに、一九九六年に日本最初の滿洲語文法書である『滿洲語文語辭典』を出版し、二〇一〇年には滿文史料の譯注でもあり、かつ讀本としても利用出来る面を持つ『內國史院滿文檔案譯注』も出版した。評者もこれまで滿文史料を讀解する上で、

この二書を大いに利用させてもらったが、今後はこれらに加え本書『滿洲語辭典』も活用させてもらうことになるだろう。

河内氏は本書の冒頭で、「この『滿洲語辭典』は、できれば滿文檔案を讀む歴史學研究者に使つて欲しいとの希望をもつて作業を始めた。」と述べているが、本書は歴史學者としての立場から、滿文史料を讀解する際に必要なあらゆる情報が反映されており、まさに河内氏の清朝史・滿洲史發展に對する希望が込められているといえる。

今後、國內外に所藏されている膨大な滿文史料を利用しての清朝史・滿洲史研究はさらに進展して行き、滿洲語を學ぶ研究者や學生も増えていくと思われる。そうした人達によつて、今後本書は必須の工具書になるであろうし、評者も本書が今後『滿和辭典』と同様に、長く多くの人々によつて活用されていくことを願つてやまない。

二〇一四年六月 京都 松香堂書店
B 五判 一八二二一七五頁 三〇〇〇圓十税